

## 中部ジャワ村落の構造

高橋 晴夫 善行 雄

### 一、はじめに

インドネシア・ジャワ農村についてはC.ギアツの「アグリカルチャーラル・インボルーション理論」および「貧困の共有理論」、さらには「緑の革命」など主としてその農業・経済構造とその変化に関する論点をめぐってわが国でも様々な研究がなされてきた。しかし、そこでは必ずしも農村社会ないし村落の全体的構造や生活の実態については明確にされてはいない。

本報告では、中部ジャワのふたつの村落調査結果に基づいて、そこでの農業、家族、村落生活などの最近の実態を紹介しながら、ジャワ村落の全体的な理解に迫ってゆきたい。しかしながら、今回の調査がもつ様々な制約条件から、報告ではジャワ農村をめぐる論点に関して断定的な結論を出すというのではなく、あくまでも事例に即して事実を確認しながら問題点を指摘してゆくという形をとる。

なお、本報告のもとになった調査は、文部省科学研究費海外学術調査「東南アジアにおける都市化の社会学的研究——タイとインドネシアの比較研究——」（代表者古屋野正吾・名古屋商科大学教授）として昨年十一月～十二月に実施された。

### 二、調査地域の概況

中部ジャワ・ジョグジャカルタ特別区（この中に調査村落がある）の首都ジョグジャカルタ市は人口四〇万人、十五大学を擁する行政都市・学園都市であるが、経済的には周辺の水田農村に支えられた商業都市である。近代工業は皆無に近く、この点、資本投下が集中し近代産業が発達した西部のジャカルタ周辺地域とは対照的である。この地域の伝統的な手工業であるバティック製造は近年プリントによる大量生産方式への移行により農村副業としての地位を後退させている。

人口は近時停滞しているが、この地域は人口稠密なジャワ島のかでも最も人口密度が高く、過剰人口の圧力の下に「絶対的貧困」が指摘してきた。

ふたつの調査村落があるバントゥル県は特別区の中でもスレマン県と並んで比較的豊かな農業生産が営まれているといわれている。一方の村落はジョグジャカルタ市から約八K.M.南に下ったセウォン郡ブンドボハルジョ村バンドゥン（一二四世帯、六五〇人）、いま一方の村落はそのバンドゥンよりさらに十五K.M.ほど南に位置するサンデン郡ムルティガデイン村ピリソ（八五世帯、三七〇人）である。

いずれの村落も水田稲作農業を中心とする物的基盤としているが、何分にも零細な経営であるために農業で自立できる世帯は少なく、多くが多様な副業に従事しながら生活を維持している。七〇年代以降交通に革命的な変化をもたらしたといわれる乗り合いバス「コルト」（日本製ワゴン車）とバイクの普及はジョグジャカルタ市や県都バントゥル市などへの通勤圏を拡大するとともに、地域住民の就業構造をより複雑かつ多様なものにしている。

### III' kelurahan (行政村) と padukhan (村落)

地方行政組織として日本の市町村にあたるもののが kelurahan である（農村部では一般 desa といわれる）。そこには役場が置かれ、lurah (村長) 以下十数名の吏員（給料はなく、役職田が与えられる）が行政事務を執っている。この行政村には議会も置かれているが、そこで議論はあまり活発でない。行政村は教育や土木など広範な事務を担当しており、そのための予算を持つが、財政規模はきわめて少額である。それだけに、各戸に課される賦役労働などの住民の直接的負担が行政村運営にとって大きな役割を果しているといえる。

行政村が弱体であるという状況のなかで、その下に位置づけられる padukhan (一般に dukuh といわれる。以下この用語を用いる) はそこに暮らす人々にとって基礎的な地域集団として重要な意味を持っている。dukuh は日本の区ないし部落に相当するものとみて差し仕えないが、そのすべてが即自然村に一致するとみるとできない。しかし dukuh は日常生活上は強い共同性と統一性をもつていている。dukuh にはその長である kepala dukuh (dukuh の住民で、行政村の役人であり、村から役職田を与える) が置かれている。kepala dukuh の下に様々な役職組織をもつ K.K. L.K.M.D. といった日本の部落会に相当する組織がすぐれた dukuh に画一的に設けられ、kepala dukuh を補佐しながら dukuh の運営にあたっている。行政村や dukuh り方をみるかぎり、中央集権的な官僚行政機構が国一州（特別区）一県一郡一村というルートで末端の村落 dukuh を厳しく統制している。

#### 四、農業をめぐる最近の動向

調査村落の農業は稻作を基幹として、そこに大豆やサトウキビ、

屋敷地内のバナナ、ココヤシ、キャッサバなどの栽培が加わるという形態をとっている。作業の機械化はほとんど進んでおらず、耕起・代播過程に牛耕がみられるほかは全てが人力によって行なわれている。

基幹作目である水田稲作は、近年灌漑用水施設が整備されたことにより三期作が可能となつたが、平均經營規模が二十アールにも満たないという極零細經營であり、小狭な耕地の上に土地なし農民を含めて多数の人々がひしめきあつていているという状況は、ギアツの「インボルーション理論」や「貧困の共有理論」が提起された五十年代のそれと一見変わらないような感じを与える。

しかし、六〇年代にはいつて展開された多収性品種の導入、化学肥料の投下などを核とするビマス、インマス計画などのインドネシア版「緑の革命」は、灌漑の整備とあいまつて生産力の向上に一定の成果をあげ、農民の生活をある程度安定させる要因となつた。一方、そこで技術の革新（例えば、刈取作業におけるアニ・アニハ穂摘み刀から鎌への移行は）は、様々な議論をよんでいるように、それまでジャワ農村をひとつ特徴づけてきた労働慣行に少なからぬ影響をおよぼしている（ドゥルップ制の解体とチバサンという業者請負制や賃雇いなどの発生）。そして、そのことが近年の農村をとりまく社会経済状況の変化と連動しながら農民の雇用や就業構造をはじめとする生活構造を変化させつつある。

こうした動きの中で、農民の階層構成、村落の階層構造がどのように変動しているのかは大きな論点をなすところであるが、調査事例に即して慎重に検討してみたい。また、依然として過剰人口が堆積する状況下での農業の機械化や近代化的意味を考えてみたい。

#### 五、家族・親族と村落生活

今回の調査の大きな困難のひとつは家族をどのように特定するか、ということであった。ジャワの家族は夫婦家族を基本形態とし、男女均分相続をとるのが一般であるとされている。調査村落でみると、このことはほぼ確認されたが、反面、例えば親夫婦と子夫婦の住まい方や食事の仕方をひとつとつても、多様な形態がみられるし、さらに「家族」という言葉に相当するインドネシア語の *keluarga* という言葉が含意する内容がじつに広範かつ多様である。

そうした中で、ここまでジャワの家族の輪郭を明確にすることはできるか、家族は社会を構成する基礎的単位であるだけに重要な課題である。

一方、村落内の親族ネットワークも複雑かつ重層的にはりめぐされており、例えば、特定の親族関係にある人々 *dukuh* の重要な役職に連なるといった例にみられるように、親族および親族関係は村落生活の様々な場面に機能している。親族が村落の中でどのように関係づけられ、どのように機能しているのか、この点も村落を全体的に理解するうえで大きな問題である。

ところで、村落住民の生活の基底ではイスラム教のモスクを中心とする各種の宗教儀礼・行事とゴトンロヨンという相互扶助慣行（精神）とが結びつき、そして村落は精巧に組織化された共同体として存在している。そこに近年では広範な生活領域にわたる活発な集団活動が加わって、村落生活に活力と幅を与えている。さらに、電化とモータリゼーションは人々の生活環境・生活構造を大きく変えとともに、彼らの生活改善や上昇移動に体する意欲を強く刺激している。このことは農業構造の変化と並んで、従来の階層構成に一定のインパクトを与えるにはおかないとだろう。

過剰人口の圧力による「絶対的貧困」が指摘されてきたジャワ農

村ではあるが、これについて今回の短かな滞在経験と調査結果からだけで簡単に結論を下すことはできない。人々の生活の全体的構造の中での「貧困」の意味を考えてみる必要がある。